わからない事だらけだけど

ヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
わからない事だらけだけど

【Ｎコード】
Ｎ４２７９Ｘ

【作者名】
ヤー

【あらすじ】
高校生の長井は、ある夜に幼馴染みの田井中が人を切り分け土に埋める所を目撃する。
その狂気に満ちた表情とその行動は、彼の心を締め付けた。
そして彼は思い悩んだ末に、彼女と話をしてみようと立ち上がる。

始まりぃー

目が覚める。
カーテンは数年閉じたまま開かれず、暗い雰囲気が立ち込めていた。
テレビ昨日からつけっぱなし、画面では節操なく働く繁華街の様子をアナウンサーがインタビューと銘打って質問をぶつけている。

俺は黙って電源ボタンを押し、ソファーから立ち上がる。
エロ本やコーヒーの缶、そしてぐちゃぐちゃの新聞紙が散らかる部屋を何の抵抗感もなく歩く。
足元のごみを蹴り、洗面台に向かう。
ここは比較的ごみが少ないがいろんな所にほこりが乗っている。綺麗とは言いがたい。

手短なタオルで汚れた鏡を拭いた。そこに映るのは自分の顔。髭やくまが酷い。何より疲労感が顔から滲みでている。
「俺は・・・」
昨日から学校は行っていない。確かに行けば変わるかも知れない。
変わるかも知れないが、現状打破は出きるかも知れない。
俺は蛇口をひねって水をだす。
両手で器を作り、顔に浴びせる。

行こう、学校に。今を変えるために。

意を決した俺は表情を締めなおす

狂気ぃー

友達とのカラオケ祭りからの暗い帰り道を歩いていた。
時間は日にちが変わった１２時１５分。歩く道は人通りの少なく、
街灯が途切れ途切れに点滅を繰り返していた。
俺はペットボトルに入ったぬるいコーラを飲みつつ、お巡りさんを
警戒していた。何せ今は制服のままであり、見つかると補導される
かも知れないからだ。
まぁ・・・この道自体、迷路のようにいりくんでいるから撒くのは
簡単だけど。

野球部さながらのエナメルバックを揺らしながら歩く。
すると、家と車道に囲まれた小さい公園が見えてきた。
青いペンキの塗られた滑り台、鉄の鎖で繋がれたブランコ、砂場、
コンクリートの塗装か剥げている目がでかい楕円形の可愛らしい蛙
の像。すべてが夢と共に色褪せ、塗装が剥げていた。
思い起こす友達との思い出。

（あの頃が一番楽しかったのかも知れない・・・）

気持ちは初老だが、今は高校生。先を急ごうと足を進めた。
その時だ。
砂場に人影が揺らいで、何か堅いものをノコギリで切り分ける音が
響いた。
「あ。音だしちゃった。」
声もする。女の子の声だ。
「まいいか。誰もいないしね。」
周りを見回して言った。
イヤイヤ俺いますやん。と思いつつ電柱の影に隠れていた。

途切れた音が今度は連続して繋がった。
ギコギコギコギコギコギコギコ・・・・・バキ！・・・・・・ギコギコ
ギコギコギコギコギコ・・・・バキ！・・・・・ギコギコギコギコ
コギコギコ・・
ノコギリが何かを削り、折れる音。
しばらくすると、鉄臭い臭いも漂ってきた。
不穏な雰囲気と現実味の湧かない恐怖は吐き気を催して、それを必死に堪えながら、道を変えようと公園に背を向けた。
（何か知らないけど、あんなマッドサイエンティスト染みた事みてらんねーよ！）
そそくさと逃げようと歩を進めると、背後に気配を感じた。動物などではなく、人間独特の雰囲気を。

「・・・がいくん？」

か細い声がしっかりと耳に届いて、汗が瞬く間に引いていく。俺は恐る恐る振り向いた。
俺と公園の間には街灯がある。その街灯が照らす明るい光の枠組みの外に、断片的なパーツがシルエットとして浮かんでいる。勿論それだけではどんな姿なのかはわからない。
だが、何故か俺の頭にはある人物の顔が浮かんでいた。俺は知っている。
その声。その呼び方。俺はこいつを知っている。
恐怖に震えながら、もっと別の感情が沸き上がる。間違いであってくれ。そう願った。
震えた声で、名前を呼ぶ。
「田井中？」

名前を呼ばれるのを待っていたかのように、ソイツは街灯の下に現れた。
細い眉。細い首。白い肌。茶色の目を大きく見開き、ハーフのような顔立ちは驚きの表情を作っている。田井中もまた制服のままだった。
そして何よりも右手にはノコギリをしっかりと握って、全身は血で赤く染まっていた。
「何・・・してんの？」
彼女は驚きからいつもの笑顔になって、手に持っていたノコギリを俺に見せた。
「解体！」
あっけらかんと言いはなった。

学校。

吹き上がった汗と、寝起き特有の体の暖かさが今まで寝ていた事を自覚させた。
息も切れ切れに顔を上げて辺りを見ると、先生の黒板に書く古文を、生徒らがノートに移しているようだった。

俺は学校に来ていた。
そうだ。思い出した。俺は、あいつにあの時の事を聞くために学校に来たんだ。ほんとうに人間を解体していたのかを、確かめるために。

「今は国語の時間だよ。」
記憶をたどっていると後ろの席から声がした。反射的に体がビクッと震える。
「・・・大丈夫？風邪でも引いたの？」
俺は後ろの奴に返事をした。
「あ、ああ、悪い。ちょっとな。」
悟られては行けないといつもの調子を装った。誰にもわかるわけないのに。

・・・・だが今になって考えてみれば、ほとほと現実味が薄い。
容姿端麗。性格も、人間関係も、成績も、困る所がない所が困る所のような完璧超人が、人を殺し解体した。誰も信じないし疑わないと思う。
とは言うが、現実に起こってしまったのだ
から仕方がない。そう、だから俺は彼女に自主して欲しい。俺をいつも助けてくれたように、彼女を助けたい。

ふと机には二枚の古文の問題がかかれている紙が置いていた。
「悪い。一枚多くないか？」
肩をこづいてプリントを一枚差し出した。振り向くと迷惑そうなに眉を寄せて、当たり前のように言った。
「綾瀬さんいるじゃん。」
は。
心臓の鼓動が一層際立った。
「ねぇ、プリントは？」
後ろにゆっくりと目だけ動かした。
そこには手にもったザラ紙のプリントを待つ、田井中の笑顔があった。
口の端が勝手に歪む。笑いが込み上げる。絶望の色が脳を支配して、汗と恐怖心を造る。
「おはよ。長井くん。」
いつもの笑顔は、いつものではない。そんな気がした。

世界。

放課後を知らせるチャイムが、夕闇の空に遠く響いてくる。河川敷を歩きながら、そのチャイムを背に帰路を歩いている。

通り行く人は笑顔で、その中には俺へと挨拶をしてくる老婦人に頭を下げながら、考え事をしていた。

この日本は、５０年前。一度パンデミックが起きた。
感染力の強い未知のウィルスが世界を包んだ時、外交や貿易が盛んな日本はそのウィルスの影響を押さえる事ができず、一手に受けてしまったらしい。
ウィルスの症状は”無意識の殺人”。性格や体調に何らの変化はなく、気付くと人を殺しているというもの。
そのウィルス、「ゴースト」という名前だが、発生原因がわからない為に日本国民の殆どにワクチンが投与された。このワクチンは国民の四大義務としても加えら、そのウィルスに死の果てがないと言う事がテレビで流された。

とは言うものの、５０も前の話で俺には実感がわかない。
だがもし、田井中がそのワクチンを受けていないのだとしたら．．．．

地面に転がる石を蹴りながらそんな事を考えていると、勢い余ったその石は坂に落ちて、川へと転がって行った。
「あ．．．」

川辺に向かって転がる石は、その場に一人佇んでいた女の足元で静止した。
謝ろうと声をかけようとしたが、視界が女の顔を捉えると、恐怖が喉を締めた。

それは田井中だった。

驚きと恐怖で背筋が冷たく感じて、顔が固まった。
田井中は寂しげな眼差しを川へと向けて、長く綺麗な髪をなびかせながら笑っている。
その笑顔は昔のままだ。なのに何故だ。何故お前が人を殺した。昔のお前は優しくて、虫も殺せなかったのに。・・・・それも、ウィルスの性なのか？
田井中の背中を見ながらばれないように、忍び足でその場から逃げた。

その日、田井中は俺に気付く事はなかったけど、俺は気づいた。彼女の心は、闇に埋もれているのではと。

接近。

午後６時。俺は部屋に籠ってベッドに横たわっている。下の台所からトントントンとリズミカルな音が聞こえて、ジャガイモとニンジンを煮たような匂いがした。母が肉じゃがを作っているようだ。

隣部屋では妹と妹の彼氏が愛を囁き合っているようだ。
壁越しで聞こえにくいが、「誰よりも愛してる。」とか「愛があれば地球なんていらない」とか、中学生にしてはくどい事を言っている。こっちからすれば歯が浮くようで居心地が非常に悪い。
「死ね！！お前らが地球いらなくても、俺はいるんだよ！！爆発しろ！！」
力限り心の中で叫んだ。

やりきれない気持ちが混み上がってくる。どす黒い何が頭を包む。
特に理由もなく、おもむろに携帯を開いた。着信履歴が一つだけあった。
番号登録のされていない物で、市街地局番が頭についてる。つまりは固定電話からの着信と言う事。
「誰だ・・・」
考えたくはないが、田井中とは親い関係だったので固定電話の番号は登録してある。
つまりは友人関係か・・・それとも間違い電話か。
スルーしようとも思ったが、何故かかけ返してしまった。
通話ボタンを押した後で少しばかり怖くなったが、どうやら恐いもの見たさは人一倍のようだ。

【現在、この電話番号は使われておりません。番号ご確認の上・・・】

返事は予想外にも留守番電話サービスのお姉さんのお声。しかし、脱ぐいきれないのは、このお言葉だ。
??
電話が使われていない。通話中ではなく、繋がらない?俺は眉をひそめる。

【現在こ・・・でん・・・・ご・・・】

突然ノイズが走り、優しいお姉さんの言葉が途切れ途切れになる。そしてそのノイズは波のように声を遮って次第に大きくなり

【ザーー・・・・】

完全に飲み込んでしまった。

俺は気味が悪いので携帯を閉じて、電源を切った。
なんだろう。もしかすると、幽霊でもかけてきたのかも知れない。
非科学大嫌いな俺がそんな事を真面目に考えてしまった。
「カレー出来たよー」
母の声が聞こえた。
まぁ、もうそうそうないだろうよ。考える事を放棄するように、携帯をベッドに放り投げた。

三日。

三時間目、黒板の上部の僅なスーペースに立て掛けた正四角形の時計を見た。後２０分も経たずにチャイムがなる。

教室の雰囲気は先生という抑圧的な存在がいない為、友達同士で喋ったりなどもう殆ど休み時間に近い。

俺もそれにあやかって、机に項垂れながら携帯を開いていた。

着信履歴と書かれたアイコンにカーソルを合わせて、決定ボタンを押した。

上から順に最近の番号や名前が表示される。俺は三日前から電話などに使っていないので、必然的にあの番号がでてくるのだ。

ジーっと画面を見つめる

これはなんなのだろう。基本的にはつながらい　とこからかけられないし、かからない。

馬鹿でも分かる単純な事が、今の俺には分からない。

理論や考えの答えは異なる真実で崩れる。子供の頃に、おじいちゃんが俺の頭に手を添えて言っていた。

意識が飛んでいたようで、頭に重みで沈んだ事によって視界が戻った。

暖かく軽く柔らかい感触が頭頂部を覆っている。心地よく、心が落ち着く。

「長井くん。考え事ですか？」

聞きなれた声がする。

視線を左に動かすと、そこにはウェーブのかかった長い茶髪が垂れ

ていた。そのまま上へと目を動かす。優しい柔和な笑顔の眩しい前野さんが俺を慈悲深く見ていた。
「ここ最近、虚ろな顔をなされていますね。」
どうやら俺の事が心配らしい。頭に置かれてるであろう手が動き出す。撫でられるのは嫌いじゃない。
「あったけど、前野さんが撫でてくれるので無くなりました。」
「フフ・・・そうですか」
優しい笑顔が俺の心を洗い流し、柔らかな光が俺を包む。
その笑顔のまま唐突に
「嘘ですね。」
と言った。
「さぁ話して下さい。長井くんの胸の内を・・・」

疑問。

昼休み。俺と前野さんは屋上にいた。
屋上は生徒の利用が許されているので、昼休みに限り解放されている。その為、屋上の一角に自販機と赤いベンチが解放されている。

ベンチに腰をかけて、缶コーヒーを一口あおる。口をはなすと重みが消えた。中身がなくなったらしき缶を手前のゴミ箱に投げ入れた。横で座っている前野さんは、俺の携帯をもって画面を睨んでいた。

彼女には昨日の事を話した。
笑ったまま相づちをうって再度かけたりしてみせた。結果は同じだった。

「本当に不思議ですねぇ・・・」
眉間にシワがよって呟いた。
「どこの県でもないですし、外国でもなさそうです。ましてや使われていないのに掛かってくるのも可笑しな話。」
”いたずら”だけでは説明出来ないと言うことだろう。
「まぁこういう事もあるのでしょう・・・」
「はぁ。」
落胆。前野さんは息を吐いた。

昼休みは終了。お互い別れを言って教室へ帰っていった。
何もわからないのは、本当に嫌だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4279x/

わからない事だらけだけど

2011年11月6日03時17分発行